

第三十四回

忠度

金子敬一郎

松山喜多流能

令和元年七月十四日(日)午後一時始

松山市民会館小ホール能舞台

狂言 昆布売 古川喜朗

小鍛冶 金子龍晟

主な出演者(重要無形文化財総合認定者)

シテ方 喜多流

金子匡一 金子敬一郎

塩津哲生

中村邦生 長島茂 狩野了一 友枝雄人 内田成信 佐々木多門 大島輝久

塩津圭介 佐藤寛泰 谷友矩 金子龍晟

ワキ方 下掛宝生流

坂苗融 坂苗功

大鼓方 葛野流

亀井広忠

笛方 森田流

左鴻泰弘

狂言方 大蔵流

古川道郎 古川喜朗

小鼓方 幸流

曾和正博

太鼓方 観世流

小寺真佐人

チケット申込やお問合せ先

〒790-0856 松山市南町2-2-12

TEL 089-931-6928(金子舞台)

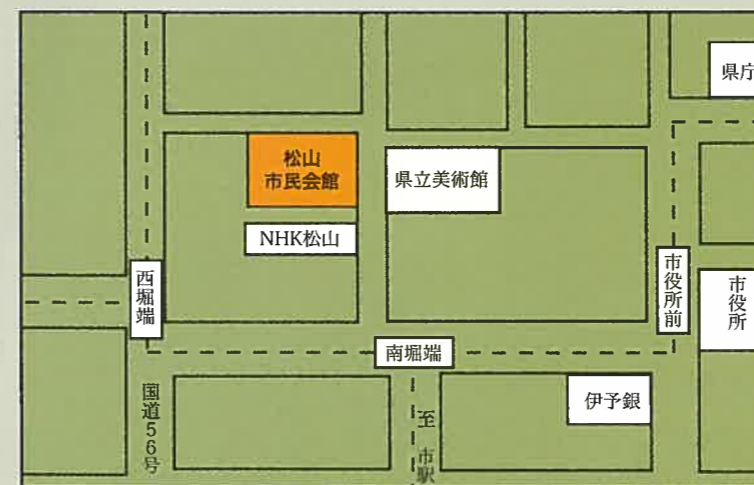
E-Mail kyou1@mac.com

鑑賞券8,000円

会場

松山市民会館
小ホール能舞台

愛媛県松山市堀之内 TEL 089-931-8181



主催 金子匡一後援会・愛媛喜多会

後援 愛媛県・愛媛県教育委員会
松山市・松山市教育委員会
愛媛新聞・南海放送株式会社
テレビ愛媛・あいテレビ
愛媛CATV・松山芸能文化協会
(社)愛媛能楽協会

許可無き者の演能中の写真撮影、録音、録画は固くお断り致します。

番組

： 解説 ： 大島輝久

後シテ・平忠度の霊
前シテ・樵翁 金子敬一郎

能 忠 度

ワキ・旅僧 坂苗 融

大鼓 亀井広忠
小鼓 曾和正博 笛 左鴻泰弘

間・須磨の里人 古川道郎

後見 塩津哲生
友枝雄人

金子龍晟 佐々木多門
塩津圭介 狩野了一
大島輝久 長島 茂
佐藤寛泰 内田成信

地謡

： 休憩二十分 ：

狂言 昆布売

シテ・大名 古川喜朗
アト・昆布売 古川道郎

仕舞 頼 政 金子匡一

： 休憩十分 ：

後シテ・稲荷明神
前シテ・童子 金子龍晟

能 小 鍛 冶

ワキ・宗近 坂苗 融
ワキ連・橋道成 坂苗 功

大鼓 亀井広忠 太鼓 小寺真佐人
小鼓 曾和正博 笛 左鴻泰弘

間・稲荷明神の末社 古川道郎

後見 金子匡一
狩野了一

谷 友矩 金子敬一郎
塩津圭介 友枝雄人
大島輝久 中村邦生
佐藤寛泰 内田成信

地謡

終了予定 午後5時30分頃

忠度(ただのり)

「千載集」の撰者、藤原俊成の没後、その家人のひとりが出家し西国行脚に出かけます。ある日、須磨の山里に人知れず咲く山櫻の木に手向けをする老人に出会います。僧が一夜の宿を乞うと老人はこの花の陰に勝る宿はあるまいと言いつつ、「行き暮れて木の下陰を宿とせば…」と詠んだ平忠度ゆかりの櫻であることも語り、僧に弔いを頼みます。そして老人は、自分こそがその忠度であることをほのめかし姿を消します。その夜、花陰に仮寝する僧の夢の中に甲冑姿の忠度が現れます。この世における何よりの執心は、『千載集』に自身の歌が選ばれたが、朝敵の身のため「詠み人知らず」と記されたことと語り、これを俊成の子、定家に伝え作者名を明らかにしてほしいと訴えます。そして西国下りのおり、俊成に自分の歌集を託したこと、一の谷で岡部六弥太に討たれた有様を詳しく再現して見せ、回向を頼むと櫻の木のもとへ消えて行きます。

平忠度は文武両道に優れた人物として修羅道の苦患の他に、自分の詠歌に対する執念も存分に描かれています。前段では散る櫻を見ながら風流を解く閑雅な老人の姿を、後段では歌道への執心を残しつつも六弥太との組打ちの様子を見せることで修羅能としての勇ましさを感じさせます。特に組打ちの場面では謡に合った写実的な型が続き、初めは忠度の側から、首を撃ち落とされてからは六弥太の視点から演じられます。能ならではの表現方法と言えます。

昆布売(こぶうり)

大名は外出するのに今日に限って太刀持ちが居ない。適当な者に供をさせようと、通りかかった若狭の小浜の召し(献上)の昆布を売る男をつかまえて、無理矢理太刀持ちにさせます。怒った昆布売りは大名を油断させてから太刀を抜いておどし、「昆布召せ、昆布召せ」と昆布を売らせます。昆布の売り声を平家節、小歌節、という変えさせて大名をからかいますが：

小鍛冶(こかじ)

夢で告げを受けた天皇の命により、勅使の橘道成は三條小鍛冶宗近のもとを訪れ、剣を打つよう命じます。宗近は、自分と同様の力を持った相鋌を打つ者がいないと訴えますが、聞き入れられません。進退きわまった宗近は、氏神の稲荷明神に助けを求めようとします。すると宗近は、不思議な少年に声をかけられます。少年は、剣の威徳を称える中国の故事や日本武尊の物語を語って宗近を励まし、相鋌を勤めようと約束して稲荷山に消えていきました。

家に帰った宗近が身支度をすませて鍛冶壇に上がり、礼拝していると稲荷明神が狐の精霊の姿で現れ、「相鋌を勤める」と告げます。明神の相鋌を得た宗近は、無事に剣を鍛え上げました。そして宗近と小狐のふたつの銘が刻まれた剣「小狐丸」が出来上がります。明神は小狐丸を勅使に捧げた後、雲に乗って稲荷の峯に帰っていきまふ。非常に変化に富み、前半、後半ともに見どころの多い人気の曲です。前半では宗近の前に現れた不思議な少年が、名剣の霊験を語るころ、特に火に囲まれた日本武尊が、草薙の剣を抜いて草をなぎ払い、炎を敵に返して退ける名場面の語り動きの変化が面白く、後半は相鋌を勤める明神と宗近が剣を鍛えるクライマックスへ向かってノリ良く進んでゆくとところが妙味があります。